

「ガンディーのインド」

宮原 豊 (9組)

(元公益財団法人日印協会事務局長)

世に数多くの「ガンディー本」がある中で、インド研究家として多くの優れた著書のある畏友・竹中千春さん(立教大学教授)により、ここに新たに「ガンディー」評伝が上梓された(岩波新書)。この本を読みながら種々のことを考えさせられた。

【今も世界中で尊敬されるガンディー】

2018年1月30日は70回目のガンディー殉難日であった。また、来年(2019年)はガンディー生誕150年を記念して一年を通して、インドのみならず世界各地で記念イベントが開催されるという。ガンディーは平和を探求した偉大な聖人として世界の人々から尊敬されている。「非暴力不服従」の戦いでインドの独立を導き、世を去って70年経つ今も、世界各国の政治家や宗教家からガンディーの思想は強く支持されている。それにも拘わらず、今も世界各地で暴力は過酷さを増し、暴力の連鎖は止められない。ここでもう一度ガンディーの生き方を学んでみたい。



【生身の人間ガンディーを知る】

「神のようなマハートマ(偉大なる魂)」でもなく「偉人のガンディー」でもなく、「人間としてのガンディーを描き出し、ここで学ぶべきことがあるとすれば、私たちと同じように悩み、ときには挫折、それでも八〇年近い人生を生きた一人の人間として、モーハンダース・カラムチャンド・ガンディーという(生身の)人間を見なければならぬと思う」と著者は言う。洞察力と筆力により、著者の意図は見事に成功している。

「非暴力不服従」を最大の武器としてインド独立運動を戦ったガンディーは、「人間が好きで、いつも人々の中にいて、語りかけ、手を取り合って、人々とともに日々の苦楽をし」、人々はガンディーを「マハートマ」と尊敬し、また「パプー(お父さん)」と愛した。しかし、そのようなガンディーでさえ、「自分がついに説得できなかったのはジンナー(イスラムの指導者)とハリラール(長男)だ」と言うように、生身の人間としては政治的にも家庭的にも必ずしも十分に幸福であったとは言えなかったのかもしれない。

【マハートマはなぜ暗殺されたか】

リチャード・アッテンボロー監督の映画「ガンジー Gandhi」を観た人は多いと思う。ガンディー

はインド独立 5 か月半後の 1948 年 1 月 30 日に暗殺されたが、映画はその場面から始まる。1950 年 1 月 26 日に憲法が制定されインド共和国が成立する 2 年前のことであった。

ガンディーはなぜ暗殺されなければならなかったのか。“My life is my message” ガンディーは自分の“生き様”をそのままに人々に接してきたが、神ならぬガンディーは、彼の願いに反して、彼の生前においては、広大で宗教・民族・文化も多様なインドを完全に一つにまとめることは出来なかった。神ならぬガンディーは「自ら過ちも失敗も犯し、意図に反して彼を恨み憎む人も生み出してしまった」のかもしれない。それでも、「ガンディーは最後まで常に内省を深め、並外れた努力によって、神あるいは運命に与えられた仕事を全うしようとする」人であった。

独立運動の過程で自治(自主投票)を勝ち取ろうとする不可触民(ダリット)に対しては、断食という強硬手段により辛うじて社会の分裂を食い止めたものの、独立直前にジンナー(イスラム教徒)は「多数派のヒンズー教徒と同じ国には住めない」と分離独立を目指し、宗教国家パキスタンを建国した。

そのような状況下で、「世俗主義(宗教に寄らない政治体制)」と「民主主義」を国是とした共和国建国を進めるインドにおいて、ヒンズー教徒右派(過激な民族主義)がガンディーを恨み、ガンディーを苦境に追い込んだ。ガンディーは待望の独立インドの国作りの渦中に暗殺されてしまった。

【暗殺されて永遠の国父になった】

独立インドのシンボルとしてガンディーは実権を伴う総督の地位に就くべきだったのかもしれない。事実、大英帝国最後の総督マウントバッテン卿は「国民の父」としてガンディーこそが独立後のインド総督に相応しいと考えていたふしがある。しかし、独立運動の同志ネルーは国際情勢を理由にマウントバッテン卿に総督を継続するよう要請し、ネルーは自ら初代首相に就いた。ガンディーは政治的地位を望んでいなかったとしても、独立後のインドの分裂に直面し、自分が何の政治的実権もない立場にあることに内心歯がゆさを抱いていたかもしれない。

ある社会学者は、暗殺とは「暗殺者と被害者が共同で取り組んで執筆した声明なのだ」と喝破し、「ガンディーの暗殺は誰も予想しない突然の出来事だったのか」と問う。独立後もガンディーはインド社会の矛盾や対立の中に何ものをも恐れずに身を挺して国民の分裂を食い止めようとした。最後の 2 年間は極めて無防備であったが、本人は「暗殺」を予見していたのかもしれない。暗殺実行犯と犯行グループはもちろん有罪であるが、その危険性を感知しながら見過ごしていた政治指導者たちも重い責任を背負うこととなった。

【インドのインドたる所以】

私事に関わることながら、2002 年ニューデリーで仕事し始めたころ、にわか勉強で無知な自分は、「インドはあまりにも広大で多様であり、統一された一つの国であることが奇跡のようだ」と思った。国の面積は日本の 9 倍、人口は 10 倍、主要 28 言語が公用語として認められており、主な言語別に州が分かれ、米国の州制度並みに各州は独立性が強い。「インドは何故インドなのか？」と呟くと、自分とほぼ同年代のインド人から「日本は何故日本か」と反論され、広大なインド亜大陸の長い歴史と、英国植民地時代や独立運動など、インド歴史の肝(キモ)を教えられた。

その中で彼の家族の歴史についても知った。「分離独立の時には自分は母親のお腹の中にいて、家族は全財産を捨てて故郷の東ベンガル(今のバングラデシュ)から逃れた。そして、ニューデリーのベンガル人難民キャンプで少年時代を過ごした」と言う。一見全てがバラバラなインドはあるが、亜大陸の中で繰り広げられた歴史は共有され、そこからインド人としての一体感と愛国心が形成されているのだろう。そして、明らかにインド人の心の中心にガンディーがいる。

【国の精神的なシンボル】

ガンディーが死んで2年後の1950年に共和国に移行したインドの憲法は、中央集権と地方分権をバランスよく組み合わせている。インドの政治体制では、大統領は実権のないシンボルとして存在し、国政選挙で選ばれた首相が政治的実権を握る。しかし、インドでは小額紙幣から高額紙幣まで全てのお札にガンディーの肖像画が描かれていることから分かるが、殉死したマハートマ・ガンディーが何者にも代えがたい国と国民の精神的なシンボルであり続けているのである。

ネルー首相は「死んだガンディーを」あるいは「ガンディーの死を」これ以上ないくらい巧みに利用し、インド統合の精神的な象徴として国の安定を図ったと言える。多くの国民はガンディーの死に深い悲しみ覚え、心からその死を悼み、聖人・マハートマ(偉大な魂)・国父・パプー(お父さん)として厳かに国葬が営まれ、デリーのヤムナ川(ガンジス川支流)に近いラジ・ガットで荼毘に付された。そこには慰霊碑とガンディー記念館が建てられた。もしインドに行く機会があれば、参拝することをお勧めしたい。(2018.2.9)



写真:スジャン・チノイ駐日インド大使と